

「お金の歴史（物々交換からキャッシュレス）」



貨幣がなかった時代、人々は必要なものを自分たちで生産する自給自足の生活をしていました。縄文時代には、石器の材料で産地が限定される黒曜石や乾燥させた保存食糧などを物々交換で他の地域から手に入れることはありましたが、それ以外はほとんど自分の住んでいる地域でまかなえるものだけで生活をしていました。しかし、弥生時代からヤマト政権の時代になると、自給自足が出来ないものを物々交換で幅広く手に入れ、より豊かな生活が行われるようになりました。

しかし一口で物々交換といっても、自分が提供できるものと相手がほしがっているものとが一致しなければ、話はまとまりません。また交換する品物の価値が同じであればよいのですが、その価値があまりに違う場合も物々交換は成立しません。誰もが例外なしにほしがり、誰にとってもその価値が共通であるものを持っていれば交換の話がまとまる可能性が高くなります。

誰もがほしがるもの、共通の価値を持つものとして生まれたのが「貨幣」です。

貨幣となるものの条件としては、ダイヤモンドのように価値が極めて高いものは一度手に入れたら手放そうとせず、かえって流通しなくなってしまうので、ほどほどに価値が高く広い範囲に流通するだけの数量が確保出来、運搬と保管が簡単に出来、質の均一さや価値の安定を保てる、そして必要な分だけを分離して、簡単に数えることが出来ることが必須条件となります。

東アジア世界で、歴史上最初に貨幣が用いられたのは、中国の内陸に存在した「殷の国」でした。ここで貨幣とされていたのは、「寶貝」の貝殻です。かつて、貨幣として用いられていたことからそのように呼ばれ、豊産・繁栄・再生・富などを象徴する縁起の良い貝とされています。「寶貝」は見た目も美しく、裏面を削って穴を開け紐を通せば持ち運ぶ事が出来、保存も容易なため貨幣にふさわしく、2 cm くらいの大きさの貝殻が貨幣に用いられることが多く、「貝貨」と称されています。

経済活動に関係する漢字に「貝」という字を含んだものが多いのはその名残です。

「貨幣」「貯金」「費用」「資本」「貿易」「賃金」「賠償」「購買」「贈物」等々

その後、周の時代にも貝貨はあったのですが、貝貨の形をまねた銅と錫の合金である青銅製の貨幣が登場し、貝貨はいつしか姿を消します。銅の溶解温度は、約 1100 度と高温ですが、溶解温度が約 230 度である錫を混ぜて加熱すると不思議なことに約 880 度と低い温度で溶解することが出来ます。加工の容易さから金属では青銅が世界史上で最初に使用されました。

現在使われている 10 円硬貨は、青銅貨と定義されていますが、少しも青くないのは銅が 95%、残りの 5%は亜鉛と錫と、錫の割合が少ないためです。

秦の始皇帝が中国を統一すると、全土を統一的に支配するため、国によって異なっていた貨幣や文字、ものの長さや重さの単位が統一されました。その結果、秦が統一前からしようしていた円銭が広く使用されるようになりました。日本の古い貨幣も中国の貨幣にならったもので、中央に正方形の穴のあいている江戸時代の貨幣の形は、秦の始皇帝に始まるものです。

日本で生まれた初期のお金の中でも、特に有名なのが、国内でとれた銀や銅を使ってつくられ 708 年に発行された「和同開珎」です。この時代に、日本が国づくりの参考としていた中国のお金を手本としていたため、大きさも形も中国のお金によく似ています。

和同開珎は長い間、日本で一番古いお金だと考えられてきましたが、さらに古い時代に富本銭というお金があったことが分かりました。富本銭は都づくりのためのお金として使われたという説や財産の象徴としてお墓にうめるための「まじない用」のお金だったという説があります。飛鳥時代の富本銭以来、お金は銅を主な原材料につくられましたが、国内でとれる銅が減ったことから、国はお金の大きさを小さくしたり、たくさん取れる鉛を混ぜたりしたお金を発行するようになり、お金の価値が信じられず使いたがらない人が増えお金よりも信用できると、再び米や布などの物品貨幣が使われるようになり国は平安時代中期を最後に、200 年ほどお金を発行しなくなりました。

ものの売り買いを活発にするために、お金が必要なことは、国も分かっていたのですが、お金づくりをやめてから長い時間がたち、技術が途絶えていたため、簡単にはお金をつくれず、平安時代末期から鎌

倉時代初期にかけて、交流のあった中国へ金銀や木材などを輸出し、陶磁器や書籍などと共にお金を輸入するようになりました。これは「渡来銭」と呼ばれ、市での商売や土地の売買などにも広く使われました。このころに、「借上」という金融業者が出現したり、「為替」とか「替銭」と呼ばれる制度がはじまりました。地元の「替銭屋」・「割符屋」と呼ばれる商人に現金を払い込み「割符」と呼ばれる証明書を発行してもらい、それを持って遠隔地まで行き、現金の替銭屋に持ち込んで現金とかえていました。遠隔地に米を送る場合にも利用され、それは「替米」と呼ばれていました。室町時代になっても国はお金づくりを行わず中国からお金を輸入しました。それが永楽通宝です。大きさも重さも一定で質がよかったため商人たちに信頼され全国各地で使われるようになりました。しかし中国との貿易量が減り、輸入される永楽通宝が減ると日本ではお金不足が深刻になりこれを解消するため永楽通宝をまねたびた銭というお金が国ではなく人々によってつくられました。びた銭は金属の含まれる量で価値が変わるため、あまり信用されず、広く使われませんでした。

室町幕府がおとろえて戦国の世になると、各地の有力大名は軍資金を手に入れるため、鉱山開発を行い、とれた金や銀で独自の金貨や銀貨をつくりました。江戸幕府を開いた徳川家康は全国の鉱山を、幕府が直接支配し、金貨をつくる金座や銀貨をつくる銀座を江戸・京都・駿府・佐渡などに設置し大きさ、重さ、含まれる金銀の割合をそろえた「金貨」と「銀貨」をつくりました。

さらに3代将軍、徳川家光は寛永通宝という「銅貨」を発行し、中世から使われていた古い銅貨を廃止し、金貨・銀貨・銅貨の3種類からなる三貨制度が出来、全国で統一されたお金を使う仕組みが整えられました。江戸時代、金貨と銅貨の交換割合はよく変わったため、ものを売り買いするときの計算が大変で、そこで発達したのが両替商です。もともと両替商は、金貨・銀貨・銅貨の交換だけを行う商人でしたが、次第に「お金を預かる」「貸し付ける」「遠く離れた土地に送る」といった、今の銀行のような仕事を行い、経済を支えるようになりました。

明治時代になると、国はお金の制度を統一するために、1871年(明治4年)に新化条例というルールを決めました。お金の基本単位を変え、10進法を取り入れ、円を基本、銭と厘を補助単位として、1円・2円・5円・10円・20円の5種類の金貨、50銭の1種類の銀貨、2銭と1厘の2種類の銅貨を発行し、形はすべて西洋風の丸型としました。また、明治時代には多くの銀行が出来、国から許可を得てお札を発行しましたがお札を発行する銀行は1つだけにすべきだということで、お札の発行をおもな目的とする日本銀行が1882年に設立され、日本のお札は日本銀行が発行する「日本銀行券」に統一されました。

経済が発達し、売り買いされる物の量が増えると、金本位制に基づいて発行するお金だけでは量が足りなくなり、「金本位制」をやめ「管理通貨制度」にかえました。

このようなお金の歴史(信用の移り変わり)を刻んで、世界はキャッシュレスの時代へ突入しております。日本でも本格的にキャッシュレス化が進みつつある印象ですが、海外諸国と比較すると日本のキャッシュレス決済比率は約30%とまだまだ低い状態です。キャッシュレスのメリットは、①現金を持ち歩かなくてもよい②お釣りの間違いがない③支払にかかる時間が節約できる④ポイントをためやすくなる⑤お店にいかなくても買物ができる⑥何に使ったか記録が残る⑦少子高齢化による対応などが挙げられますが、諸外国に比べキャッシュレス化が遅れているのは①現金への信頼性の高さ②盗難のすくなさやといった治安の良さ③レジの処理が正確で速く、現金取扱いの煩雑さが少ないなどが一つの要因になっているのかも知れません。

